

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

平成 30 年 12 月 21 日(金)午後2時 30 分～午後3時 27 分(9階 904 会議室)

○出席委員(9名)

委 員 長	石原洋三郎
副委員長	誉田 憲孝
委 員	佐々木 優
委 員	後藤 善次
委 員	斎藤 正臣
委 員	黒沢 仁
委 員	佐久間行夫
委 員	山岸 清
委 員	渡辺 敏彦

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査」

- (1) 委員長報告のまとめについて
- (2) その他

午後 2 時30分 開 議

(石原洋三郎委員長) それでは、経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査を議題といたします。

初めに、委員長報告のまとめについてを議題といたします。

前回、12月定例会議中の委員会で行政視察意見開陳のまとめを行い、11月に行った行政視察を全6点の項目にまとめさせていただきました。

本日から、これまでの調査をもとに委員長報告のまとめに入っていきますが、今回はまず委員長報告で述べる提言項目や取り上げるポイントの整理を皆様と協議していきたいと思います。

資料の委員長報告で取り上げるポイント及び提言項目の整理をごらんください。まずは、課題の部

分の整理についてであります、1 番目、本市スポーツホームタウンの課題の部分をごらんください。今回委員会で調査した中での課題については、大きく 2 点に整理してはどうかと考えております。

1 点目が(1)、福島ユナイテッド F C が市民に身近な存在となっていないということであります。7 月 23 日に実施いたしました観光コンベンション推進室による当局説明で、当局からはホームゲームの入場観客数が伸び悩み、市内のプロスポーツチームを応援する機運もなかなか盛り上がらない現状に触れ、約 10 年にわたってクラブを支援して、クラブの認知度という意味では一定程度認識されているが、いまだに市民との距離感という部分では遠い印象があり、課題と感じているというお話や、8 月 29 日に実施した福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人氏による参考人招致でも、鈴木参考人から、クラブも積極的にまちに出ているつもりではあるが、クラブの存在を知らない市民も多く、まだまだ認知度が足りない状況だと感じているという話でありました。

これらの調査の結果から、今回、当委員会では、福島ユナイテッド F C が市民に身近な存在となっていないことを課題の 1 点目としてはどうかというふうに考えております。

次に、2 点目の課題が(2)として、福島ユナイテッド F C を地域資源としての活用が不十分であるということであります。7 月に実施いたしました観光コンベンション推進室による当局説明で、本市におけるホームタウン支援の根拠として、平成 25 年 5 月に J リーグチェアマンに当時の市長名で文書を送付しているという説明があり、その支援内容としては、積極的な広報活動、市と市民が一体となって応援する機運の醸成、練習場や試合会場の確保など、ホームタウン活動に対する支援、スタジアムの改修整備の検討するとしており、このことからまさにホームタウンとして広く福島ユナイテッド F C を支援し、連携を図っていくことが本市の役割と言えます。しかし、その一方で、現在の当局の考えとしては、福島ユナイテッド F C を観光資源としてのみで捉え連携しているとの発言も見られ、地域資源として幅広く活用する視点や、より魅力的なものに育てていくという視点が抜けていると当委員会では当局説明をまとめておりました。

このことから、福島ユナイテッド F C を地域資源としての活用が不十分であることを課題の 2 点目としてはどうかというふうに考えております。

また、この課題については、福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人氏による参考人招致において、鈴木参考人より、福島ユナイテッドは地域に必要とされるクラブを目指し、独自の地域貢献活動を展開している。福島市にももっとクラブを活用してほしいと考えているし、クラブとしてもできる限り市に協力していきたいという意見も得られ、本市においては、まさにクラブと今以上に幅広く連携、活用していく余地が十分に残されている状況にあると言えます。このことから積極的に課題解決に取り組む価値があると思われます。

以上、まずは今回の所管事務調査における本市の課題を、これまでの調査結果から 2 点でまとめてみてはどうかというところで整理をいたしました、いかがでありますでしょうか。

委員の皆様よりご意見をお願いしたいと思います。この課題に関してご意見をいただければと思い

ます。

（山岸 清委員）1番はこのとおりでいいのだけれども、地域資源としての活用というけれども、資源、どんな資源あるかもわからないで活用と言われてしまって、クラブ大変でないの。どんな利用方法あるのですかと言いたくなってしまうよ。資源だから、資源としての価値がまだないのだよ、まるっきり。だから、活用しようといったって、ないのだから、ゼロなのだから、これと言われてしまって、クラブもかわいそうだし、市民だってどんな活用あるのだろうと思うよ。田植えのときの田植え手伝いでも、稲刈り手伝いでもやるかというくらいだけれども、そんな人数でないのだし、例えばこれが強くなって、J2昇格かなんていえば、みんな、地元チームだ、応援しようというふうにもなるでしょう、それは。甲子園だって何だって、金足農業だって何だって、今まで縁もゆかりもない人が応援に行くのだよ。やっぱりこういう勝負事は強くなければだめなのだ。だから、まだそこまでの実力がないから、地域資源とする活用と言われてしまって、ないやつどうやって活用するのだい、これ。

（石原洋三郎委員長）資源としては、Jリーグのチームといいますか、プロサッカーチームがあるという意味での資源です。

（山岸 清委員）だって、プロだって弱いプロだったらどうにもならないよ。何だって、野球だって、大リーグから始まって、ノンプロから高校野球からあるけれども、そのレベル、レベルで強くなければだめなのだよ。だから、J1と戦って勝てなんては俺は言わないのだ。今J3なのでしょう。J3でやっぱり上のほうの争いしていなければ、これはどうにもならないのだ。だから、無理なのだよ。

（佐久間行夫委員）今山岸委員はそうおっしゃいますけれども、我々いろんな子供たちのクラブチームとか、いろいろかかわったり今もしているのだけれども、やっぱりユナイテッドというのは、俺は教えてもらいたい、一緒にかかわりたいな、連携してみたいな、一緒にサッカー教室参加してみたいなという憧れの的ではあるのだよね。だから、そういう意味での活用の仕方もあるし、地域資源として、福島市はそういうふうに着ていくという責務があるのだということが当時の市長さんと約束したことだと私は思うのね。あなたたち勝手に強くなると私は応援しないよというのでは、これは連携とか協力とかにならないので、そういうことだと私は思って聞いていたので、おおむねよろしいのではないかなと私は思いますけれども。おっしゃるとおりです。川崎フロンターレみたいに、みんながあんな応援して、俺もあのステッカー、この前もらったでしょう、シール。早速一番高い7万円のクーラーボックスに張って、いいだろうと言っていたら、いいね、これ格好いいねと、そういうふうに言われるようになってもらいたいけれども、俺らも育てていくという責務があるのだということだと私は思うので、余り頭ごなしにそう言われると、ううんとなってしまうので、その辺は。

（斎藤正臣委員）ユナイテッドFCが地域資源かと言われると、確かに俺もそこまでのものではないような気がしないでもないのですけれども、ただそうなるための、佐久間委員おっしゃるとおりだと思うのですけれども、なっていくための支援はやっぱり必要で、そこがやっぱり課題だと思うのです。例えばナイター設備がないと、もうそれこそJリーグから降格になってしまうとか、地域資

源たり得ないようなことが目の前に迫っている中で、これが地域資源であるように行政も支援していくというようなことを課題と捉えて、(2)のほうに何か付与していただけると整理が、私の中では、つくような気がするので、そのように感じました。

(石原洋三郎委員長) そうですね。地域資源として育てていくためのといいますか、そういう活用ですか。

(渡辺敏彦委員) これずっと見ていって、当局とユナイテッドがどうのこうのというのは入っているのだけでも、市民とは話はしなかったでしょう、我々は。市民としては、ユナイテッドと当局と議会に何してもらい、市民としてだよ、何してもらえるとユナイテッドが市民と一体感持てるのかとかというのは全然、市民の意見はわからないのよね、聞かないから。

(石原洋三郎委員長) そうですね。

(渡辺敏彦委員) ということは、逆に言うと、当局と議会、我々側が市民にはこういう協力、だからここに市と市民が一体となって応援する機運づくりと書かれているのだけれども、具体的に行政として市民に対してどういうことをしてください、そういうのもないでしょう、多分。だから、市民感覚で応援したくなるようにするにはどうしてもらえばいいかというのも多分何か欲しいのだ。そうでないと、我々が勝手にユナイテッドとしゃべって、市の財産にしようなんて言ったって、そんなこと市民関係ないもの、だって。サッカー好きでない人は全然関係ないのだから。たまたま、山岸さん言ったように、田んぼに手伝いに来てもらったとか、リンゴのときに手伝いに来てもらった人らは、よう、頑張れよなんて言っているかもしれないけれども、その辺もうちょっと市民感覚で何しようみたいなのがあってもいいのかなと。聞いてはいないけれども。委員長報告にはなじまないかもしれないけれども、市民に対して我々は何を求めていくかの点もあったっていいかもしれない。ほかの仕組みで、行政でいろいろやっているでしょう。そういうのもあってもいいのかなと思う。

(石原洋三郎委員長) (1)のほうの市民に身近な存在となっていないというところで、どうやったら身近になれるか……。

(黒沢 仁委員) 皆さん言っているのはそのものだと思うの。この(1)と(2)というのは連結しているわけだね、結局は。市民に認められる存在でない限りは、地域資源になかなか大きく育っていかないということで、この(1)と(2)はそれこそ表裏一体のものなのかな、これ。これ別々に捉えることも必要だけれども、やっぱりこれを一体化して捉えて、これを課題としたほうが市民の皆さんにかえってわかりやすいのでないかななんていう思いも持ったものです。ご意見として。

(佐久間行夫委員) これだけにとらわれず、福島って意外と何か市民で一生懸命何かを育てていくとか、お祭りを盛り上げるとかという、その土壌とか風土というのは、ほかのいろいろな市町村を見ると、お祭りだって何見たって、福島って盛り上がらないよね。

(山岸 清委員) そういう市民性なのだ。

(佐久間行夫委員) 市民性でしょう。その市民性から変えていくようにしないと、自分たちも変わっ

ていかないとということだよ。そうでないとならないよ。だって、そんなことを言っている人もいるなぐらいで、みんなそう思っているのだから、正直な話。

（山岸 清委員）盛り上がらないのだ、福島は。

（渡辺敏彦委員）具体的に俺は、茂木弘人、地元出身だから、神戸のときから行ったりは、行こうと言って行ったりはしているけれども、やっぱり市民性としては無理ね。

（佐久間行夫委員）やっぱり福島って、何か一つになって物事を考えるというのが昔からなかったのかな。そういうことも背景にあるなというのを感じましたね。今の山岸さんの話を聞いていても。

（後藤善次委員）ちょっと角度は違うかもしれないのですがけれども、福島が盛り上がれば盛り上がるほど福島の周りのところって温度下がっていくような、何かそういう地域性というのはあるのかなという気がするのです。だから、もちろん自分たちが盛り上がっていくことも必要だし、何かその盛り上げ方というのが一つの課題の中に、出発点としてはこの2つは大変いいと思います。やっぱり自分たちが盛り上がって、何かほかから見たときに、ああ、福島盛り上がっているな、では福島に任せておけばいいやということだけは避けたいなという思いがあります。だから、出発点としてはこの1番、2番、これが出発点で大変結構ではないかと思います。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）それでは、皆様からいただいたご意見をいただきまして、それをまた整理してまいりたいと思います。よろしくお願いします。

それでは、次に移らせていただきます。

次に、資料の2ページ目、2番、調査を通して明確になったスポーツホームタウン推進にあたっての重点ポイントの部分をごらんください。こちらは、前回の行政視察のまとめでも触れた部分であります。まず（1）として、クラブが市民から認知、応援される存在になることの重要性であります。

①、J1やJ2で優勝争いを繰り広げる強さと人気を兼ね備えたチームであっても、どのチームも初めから強かったわけではなく、市民から応援される存在でもなかった。しかし、地道な地域貢献活動を中心に、市民に近い存在となれるよう行政とともに継続的に取り組んできたことにより、大きな成果につながっている。②、クラブが市民から応援される存在になることは、中長期的に見ると、クラブの運営、強化の面からも欠かせない要素。③、クラブが市民にとって大きな存在となることで、クラブはより活用効果の高い魅力的な地域資源としても成長するという相乗的な効果が期待できるなどといった内容が行政視察先の各自治体より説明があり、クラブが市民から認知、応援される存在になることがまずは基本事項であること、達成することで得られる効果がとても大きいことが確認できたことから、推進にあたっての重点ポイントに挙げたいと考えて、記載をさせていただいております。

次に、（2）、クラブの地域活性化効果と行政との多様な連携の可能性であります。こちらは、ま

ず福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人氏による参考人招致において、クラブの福島市へかける思い、活動の理念、地域貢献活動など、日頃の取り組みを聴取する中で、本市の地域密着型プロスポーツチーム、いわゆる福島ユナイテッドF Cが、行政としても十分に支援、連携、活用する価値のあるものだということを認識できました。

また、11月に実施した行政視察において、行政は地域に密着したいというクラブと連携し、広報による支援とともに、全庁的なクラブの活用を図り、子供の夢を育むこと、地域のアイデンティティーの醸成、健康増進、生きがいつくり、町なかのにぎわい、地域コミュニティの活性化、市の名前を全国にPRする効果など、実際にさまざまな効果を得ている実態を確認することができました。

このことから、今回の調査で、クラブがもたらす地域活性化の効果が非常に大きいこと、スポーツに限らず行政との多様な連携の可能性があることを認識した上で、スポーツホームタウンを推進していくことが大変重要であると考え、記載させていただきました。

以上、今回の所管事務調査におけるスポーツホームタウン推進にあたっての重点ポイントについて、これまでの調査結果から、この2点でまとめてみたいと考えておりますが、いかがでありますでしょうか。

委員の皆様よりご意見をいただければと思います。2ページ目の（2）について、ご意見いただければと思います。

（渡辺敏彦委員）もっともな話でしょう。山岸さん。もっともです。

（山岸 清委員）いいのでないかい。

（渡辺敏彦委員）もっともだと。

（石原洋三郎委員長）課題のところからきているところの形になるかなと思うのですが。

（渡辺敏彦委員）ただ、高い公益性を持っているかどうかというのも微妙なところだけれども、公益性があるから、活用すべき地域の重要な資源になるのだと思うね。だから、さっき言ったのと一緒なのだけれども、まずは応援される存在になるためにはどうするかということを考えると、やっぱり山岸さん言うように強くなければならないとか、あとチームの名前を売って市民にわかってもらうとか、あとそれぞれの選手個人を売ってみるとか、何かこれもうちょっと具体的なことをしていかなければならないのかなという思いはある。半分以上の人は知らないでしょう、ユナイテッドF Cって。1割ぐらいはわかるのだ。弱くても、チームの名前を売るとか、個人を売っていったって、手広く売ると、福島市のチームだといって市民の方々も応援する、これこそ機運が出てくるのではないかなと思う。議会として当局に打ってやって、市民のほうの意識の醸成を図るような努力をしろという話なのでしょう。委員長報告なのだから。

（佐々木優委員）今の渡辺さんの意見に、私そのとおりだなと思って、高い公益性を持ったということには若干違和感を感じている。やっぱり今そういう状況ではないから、感じることはできないのではないかなというふうに思うのです。だから、やっぱりいかにして認知度を上げていくかというの

を前面に出して、この文章って、高い公益性を持った、活用すべき地域の重要な資源であるということも委員長報告なんかには載るのでしょうか。

（石原洋三郎委員長）それは、皆さんとの話し合いにもよるのですけれども、ただ可能性のあるというところはもちろん可能性としてあるということだとは思っているのですけれども。

（佐々木優委員）公益性というのは、例えば小学生と一緒にサッカーの技術の向上とか、そもそも体を動かすことの醸成とか、そういうことをもって公益性というふうに言うということですよ。これだけだとちょっとわかりづらいなと思うので、そういう可能性を持ったという細かく入れたほうがわかりやすいかなと、今の段階で、高い公益性というのが市民にとってわからないと思うので。

（石原洋三郎委員長）要はサッカー教室とか、子供の夢を育むとか、あと観光資源としてとか。あとは、観戦客が来ることで経済効果があるとか。

（佐久間行夫委員）プロスポーツそのものを見れば、やっぱりプロスポーツを経営するのはスポンサーがきちんとしたやつがいて、それでみずからの努力によって、オーナーなりスポンサーはそのチームを利用して自分たちの宣伝効果を上げるために頑張る、もともとそういうふうなスポーツでしょう。それを行政とのかかわりをどうしていくかということだよ。そこがポイントだというふうに思っているのね。だから、本当は、誰も言わないのだけれども、立派なすばらしい財力のあるスポンサーがバックにいれば、ユナイテッドだってすばらしい選手をどんどん囲んで、強くなるというのはあるのだけれども、そういうのになかなか福島では恵まれていないから。もし福島ユナイテッドが財力でお金が潤沢にあって、J 1 並みの金をやると、茂木君なんかは、俺はいられないよといって、ここには、そうなる。そういうスポーツの背景の中で、福島ホームタウンとしてはそれをどうやって市民に理解してもらって、それを地域資源として育てるかというのが課題で、今勉強しているわけだからね。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか、ご意見。

（石原洋三郎委員長）それでは、ちょっと取り組み内容とかも具体的にしながら公益性という部分に触れてまいりたいと思っていますので。

（渡辺敏彦委員）言葉尻捉えて悪いけれども、例えばさまざまな面から本市に活性化をもたらす可能性があるとめてしまえばいいのだ。可能性はある。こんなふうに可能性があって、公益性が高い、高い公益性を持っていると言ってしまうから、いろいろ言いたくなるのだ、これ。だから、可能性があると一回とめてしまって、その後に今度、さっきいろいろ出たように、例えば知名度を高めるなどさまざまな活動によって高い公益性を持つことができれば、活用すべき地域の重要な資源になるという形にすればいいのでしょう。

（石原洋三郎委員長）知名度を高めていきながらということですね。

（渡辺敏彦委員）そうそう、そうそう。それも含めて。だから、可能性があるのだよというのだけは納得できるでしょう。

（石原洋三郎委員長）そのほか皆様から 2 ページについて何かありますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）それでは、皆様からいただいたご意見をもとに、２ページ目に関しても整理をさせていただきます。

次に、資料３ページをごらんください。最後に、委員会としての提言（案）を確認していきたいと思います。今回の委員長報告で提言する項目として、記載のとおり３点でまとめてはどうかということとであります。

まず、１点目が全庁的なプロスポーツチームの活用による地域活性化の推進ということとであります。細かく分けますと、記載の２点から構成されております。①、クラブは観光面だけでなくさまざまな場面で地域活性化効果をもたらす貴重な地域資源という認識のもと、ホームタウン推進の担当部署が行政の窓口となり、綿密な連絡体制を構築すべき。②、プロスポーツチームと改めてどのような連携協力が可能か協議した上で、全庁的なプロスポーツチームの活用を図り、地域の活性化とチームの市民への定着につなげるべきということとであります。

今回行政視察を実施した各自治体では、ホームタウン推進の担当部署が行政の窓口として、綿密な連絡体制を構築し、どのような連携ができるかを話し合い、観光やスポーツに縛られることなく幅広く協力して事業を行ってまいりましたことから、当局説明からも取り組んでいるように感じなかった、本市に足りない部分であると考え、提言させていただきたいと思っております。

次に、２点目が（２）、プロスポーツチームを応援する機運の醸成についてであります。①、今以上に市が先頭に立ってチームの情報発信や広報による支援に取り組んでいくべき。②、商工会や商店街、町内会なども巻き込み、協議会を組織するなど全市を挙げて応援する体制を構築すべき。③、行政がプロスポーツチームを支援する意義や効果を市民にＰＲすることで市民の理解促進を図るべきということとであります。

J１に昇格することで得られる経済効果や、市民と子供たちに夢や希望を与えるというお金でははかれない効果があり、そこに先行投資していると説明し、理解を得ているという町田市の事例があります。また、健康寿命延伸都市を実現するために、プロスポーツチームの存在が大きな役割を担っていることを市スポーツ推進計画や市総合計画の中で位置づけ、市でもＰＲしているという松本市の事例もあります。また、プロスポーツチームがこれまで根づかなかった経過を踏まえて、クラブが市と密接に連携して地域貢献活動に取り組んでいることを市民に絶えずアピールしているという川崎市の事例もありました。

また、川崎市では商工会や商店街、町内会連合会なども巻き込み、委員会を組織して全市を挙げて応援する体制を構築してまいりました。

また、駅や商店街等などにバナー広告の設置、市政だより等での試合広報、小学生向けに試合結果などを記載した広報紙を配布、窓口職員がユニホーム着用で応援する、クラブがつくったチラシやポスターを公共施設に提示し、ふるさと納税などでも応援しているという事例もありました。そういっ

たことで（２）というところを提言してみてもどうかと考えております。

（３）、ホームタウン自治体の広域化による周辺自治体との連携協力であります。こちらは、記載の１点のみの構成であり、この提言は参考人招致の委員会のまとめや行政視察を受けて整理した項目であります。

今回行政視察を実施した松本市で、松本市を含む近隣の４市１町２村にホームタウン自治体を拡大し、自治体相互の情報交換やホームタウンデーの開催といった大きなイベントを連携しながら共同で展開していた事例を踏まえて、記載をしております。

また、参考人招致の委員会のまとめから、今は広域連携の時代であり、中核市へ移行した本市が中心となって積極的にホームタウンの参加を呼びかけ、周辺自治体との連携強化を推進するべきといった方向性が導き出されておりましたことから、提言として挙げさせていただいております。

最後に、二重丸のところなのですが、以上の提言項目のほかに報告の最終部分で触れる事項として、①、②、③という３点を取り上げてみてはどうかと考えております。

①、東京オリンピック・パラリンピックの競技開催が決定している本市において、大会を支える多くの市民ボランティアの活躍が今後見込まれる。大会を契機に盛り上がったボランティア機運の受け皿としてもプロスポーツチームには大きな可能性があることも認識すべき。

②、今回の調査により、チームにはクラブライセンス、とうほう・みんなのスタジアムの照明未設置、固定座席の不足、平均観客動員不足など、問題があるということも確認できました。チームの経営にかかわる部分もあり、直接行政が支援することは困難だが、チームがＪ３や、さらにこの先Ｊ２で活躍していく上で忘れてはならない課題。ホームタウン自治体として、県や関係団体と協議する場を設けていくべき。

③、市議会としても試合の観戦、チームのＰＲなどをして積極的に応援していくべきということを記載させていただいております。

以上が提言項目であります、この３ページに関して皆様から何かご意見ございますでしょうか。

（後藤善次委員）町田でしたっけ、駅にずっとサッカーのいろんなＰＲの方法というか、ああいうものって福島にないななんて思って、もっともっとアピールするために福島市内にいろんなところにそういうものがあふれているというような、そういうこともできたらいいなと思った。例えば議員があのユニホームを着ながら議会やるとか、１日。何かインパクトの強いものをアピールしていく、福島市民にとにかくアピールするための方法というのかな、そういうものがどんと出てくると、ああ、なるほどなと、そういうものがあるのかなと思います。

（石原洋三郎委員長）インパクトのある応援、ＰＲということですね。

（後藤善次委員）だから、ここの（２）の③になるのかな。そのところが、やり方の具体的なものというのかな、アピールする大きさというのかな、大胆に。

（佐々木優委員）一番下の二重丸のところの①なのですが、オリパラの市民ボランティアとい

うのは、これから福島市でどういうふうに取り組んでいくというのって出ていたりするのですでしたっけ。

（佐久間行夫委員）もう出ているよ。

（佐々木優委員）出ていました。募集しているのですでしたっけ。

（後藤善次委員）募集始まる。

（佐々木優委員）では、何人ぐらいを募集しますというのをその後のユナイテッドのサポーターというか、そういうものに、町田ではやっていましたけれども……。

（石原洋三郎委員長）それが受け皿として移行できればいいのでしょうか。

（渡辺敏彦委員）ボランティアは、普通のやつは県が中心になってやるでしょう。県が中心になって市民の人も多分募集、公募して、なる人いるかもしれない。市も一応ボランティアと書かれているけれども、何やるかというとなかなか、ごみのほうとか、何か余りぱっとしないのね。だから、余り期待しないほうがいいのでないかなと思うな。これにひっくるめては。だから、県の公募に対して市民の人がいっぱい、福島市の人が行って、その経験をした人は十二分に使える、多分積極的な人だから。市のほうは具体的に何ボランティアやるかというの、まだ何も出ていないでしょう。聞いていないものね。市が本気になってやる業務は、万が一あったときの救急車とごみの対応なのです。オリンピックって。

（佐久間行夫委員）フラワー、西地区の環境整備、景観整備のために花を植えるとか、休耕田はアジサイ畑にするとか、ヒマワリ畑にすると。

（後藤善次委員）県のボランティアというのは市にラップしないのでしょうか。福島市の方はこのぐらいいいますとかという、メンバーを市に情報的にもらえると、そういうものではないわけでしょう。県は県ですよ、あれ募集は。個別、個人の申し込みですよ、あれ。何か団体の申し込みを認めているとかといって、企業とかグループとか団体に今声をかけているのだね。その団体でそっくりそこから何名ボランティアが県に登録するとかというのものもあるけれども、それが今後の市のユナイテッドの応援に何か携わるような移行するきっかけというのはあるのかどうか。名簿がおりてくるわけでもないでしょうし。声かけるしかないわね。

（斎藤正臣委員）今までの説明では、レガシーの部分で、ボランティアさんがたくさん登録されて、その方たちがオリンピックの後に何か活動していくというような、そういったことを目指しているというお話というのは再三あったと思います。具体的に都市ボランティアの話だと思うのですが、多分3日間以上福島市内で、登録した地域でお客様のおもてなしをするという、そのボランティアの話だと思うのですが、そのボランティアさんがプロスポーツ、ユナイテッド福島さんの何かにコミットできるような部分があるのであれば、それはやっぱり目指したほうがいいのではないですかという提言は私はあるかと思いますが、具体的な方向性と一緒なのではないですか。と思います。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか。

今サッカーの具体的な市民へのPR方法とか、あとボランティアの機運の盛り上がりをいかにオリパラからプロスポーツチームのほうに移行できるかといったところのお話をいただきました。

ほかにございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）では、皆様からいただいた今のご意見をもとに、また整理していききたいと思います。

これらのポイントを踏まえまして、委員長報告の素案を作成し、次回、1月29日の委員会で確認してまいりたいと思いますが、ご都合いかがでしょうか。29日10時ということで、たしかこの前……。

（石原洋三郎委員長）この前、29日の10時。前、調整させていただいた。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

（石原洋三郎委員長）それでは、そのように進めさせていただきます。

（渡辺敏彦委員）その前に、こればつと見たのだけれども、強くしろというのは何か書かれているのだっけ。強くするための努力を行政を含めてやると、これは書かれていないみたいなのだけれども。J1に行くとかJ2に行くとかと、強くしろと書かれているのだっけ。

（石原洋三郎委員長）先ほど佐久間委員からあった、要は育てていくという……。

（渡辺敏彦委員）この中に。

（石原洋三郎委員長）（2）のあれですか、福島ユナイテッドFCを地域資源としてといったところで、それを育てていくということで……。

（渡辺敏彦委員）それが強くすることだね。

（石原洋三郎委員長）それが強くするという事になっていくのかなというところかとは思いますが、それでも。

（佐久間行夫委員）ただ、一方、今困っている事情は、ほかのいろんな競技団体で子供集まらないのだよね。この前プロでも、野球の子供たち集めて、野球の子供たちの人口ががたっと減っているから、サッカーだけでいいのかというふうになっていて、我々相撲なんか子供全然集まらない。柔道も何もみんなそうなのね。そういう場合に、1種目だけ行政が応援するのはおかしいでしょうということもやっぱり裏にあるのだよね。そして、日本でいろんな競技にいろんな得意部門のやつがいていいのだけれど、それが何か廃れていって、なくなっていくようなところも出つつあって、いろんなスポーツ団体が消滅していく、どこも。かなり最近出てきているから。そこも、裏返しとしてはそういうことも考えなくてはいけないなとは思っていたけれども。

（石原洋三郎委員長）そのほか、あと何かございますでしょうか。

（佐久間行夫委員）さっき言ったの、行政が予算でかかわるといのはやっぱり福島はうまくないというスタンスだけは貫くの。どういう出し方といったって、サッカー場をつくるとか、整備するとか、

そういうのが行政の役割ではないかと言われると、それはお金かかるよね。そこをやらないと言うと、ここで行った来たで、俺ら応援されていないなと今度ユナイテッドは思うだろうし……。

（石原洋三郎委員長）ただ、３ページ目の二重丸の提言項目のほかに報告の最終部分で触れる事項としてというところの②なのですが、提言ではないのですが、最終部分では触れるということで、クラブライセンスに問題があるということは確認できたとは思うのです、皆さんとの話し合いで。ただ、やはり条件としてＪ３からＪ２に昇格していくことがあれば、その上で忘れてならない課題というのはやっぱりスタジアムの座席の問題とか、あと平均観客動員不足というのも、もちろんこれは強くなれば上がっていく可能性は大きいのでしょうかけれども、あとＪ３、たしか照明はなくてはいけないということは、これはあるので。

（佐久間行夫委員）平成25年５月の部分は、やっぱり一応行政としては守らなくてはいけないのでしょうか。

（石原洋三郎委員長）だから、資金的にかかわってくる部分は、提言としては、提言の中には入っては、そんなには入っていないのかな。応援する機運の醸成だったり、プロスポーツチームの活用による地域活性化の推進であったり、あと広域化による周辺自治体との連携ということで。

（佐久間行夫委員）そうすると、広域の桑折とか国見とかは意外と盛り上がる人たちはいるから、ああいう人たちに火つけると、みんなが燃えて、では少しぐらい金出そうという話で、福島市だけの負担でなくても、広域の中でうまく支えられる体制とらなくてはいけないのは、議員も一緒になって、今議長さんが広域的な中で集まりあるから、あの中でも、広域的な中でも、広域的な議会のバック体制と、あといろいろなところにそういう醸成を、そういう機運を高めるための動きは我々にもあるし、行政にもあるのかなと。福島市が、さっき、風土とか、そういうのはちょっとどうなのかな、市民性がどうなのかとあったけれども、意外と盛り上がる地域、ほかに我々、県北なんか見ると、うんと盛り上がる地域もあるから、そういう人たちが入ってきて、どんどんやると、福島市民もそれに呼応していくような形になるのかな。だから、広域性って大切だなと思うよね。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか。

ハード面のスタジアム等々に関しては、そういう形で３ページ目に記載させていただいております。

あとは、いろいろほかにも松本とかに行ったときには、町なかに遠距離で試合が見れるような巨大スクリーンだか、あったような話がありましたけれども。

（佐久間行夫委員）それは、さっき後藤委員言うように、市役所の中だって、議長室のあんなのじゃなくて、各課の前にちょっとユナイテッドのマークぐらい張ったって別に、何だろうから始まるのだから、最初は。そうやって何だろうと始まるから、あのマークあっちこっちに張ればいいのだよ。議員も車に張って歩くか。店の前にも。

（石原洋三郎委員長）ほかございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) それでは、以上で経済民生常任委員会を終了いたします。

午後 3 時 27 分 散 会

経済民生常任委員長 石原 洋三郎